

宝鏡三昧

如是の法、仏祖密に附す。

汝今これを得たり、宜しく能く保護すべし。

銀盃に雪を盛り、明月に鷺を蔵す。

類して齊しからず、混ずるときんば処を知る。

如是之法 仏祖密府

汝今得之 宜能保護

銀盃盛雪 明月蔵鷺

類而不齊 混則知処

意言に在ざれば、来機亦おもむく。

動ずれば窠臼をなし、差ば顧佇に落つ。

背触ともに非なり、大火聚の如し。

但文彩に形せば、即ち染汚に属す。

意不在言 来機亦赴

動成窠臼 差落顧佇

背触共非 如大火聚

但形文彩 即属染汚

夜半正明、天暁不露。

物のために則となる、用いて諸苦をぬく。

有為にあらずといえども、是語なきにあらず。

宝鏡にのぞんで、形影相観るがごとし。

夜半正明 天曉不露
為物作則 用拔諸苦
雖非有為 不是無語
如臨寶鏡 形影相觀

汝なんじこれ渠かれにあらず、かれ正まぎに是これなんじ。

世よの嬰兒よういの五相ごそう完具がんぐするが如ごとし。

不去ふこ不来ふらい、不起ふき不住ふじゆ。

婆婆ばば和和わわ、有句うく無句むく。

ついに物ものを得えず、語ごいまだ正ただしからざるがゆえに。

汝是非渠 渠正是汝

如世嬰兒 五相完具

不去不来 不起不住

婆婆和和 有句無句

終不得物 語未正故

重離じゅうり六爻りつこう、偏正へんしょう回互えご。

疊たたんで三さんとなり、變へんじ尽つきて五ごとなる。

莖草ちそうの味あじわいのごとく、金剛こんごうの杵ちよのごとし。

正しょう中ちゆう妙みよ挟ぎよう、敲唱こうしょう双しやうびあぐ。

重離六爻 偏正回互

疊而成三 變尽為五

如莖艸味 如金剛杵

正中妙挟 敲唱双拳

宗しゅうに通つうじ途とに通つうず、挟きょう帯たい挟きょう路ろう。

錯しやく然くねんなるとききつんば吉きつなり、犯ぼん忤ごすべからず。

天てん真しんにして妙みょうなり、迷めい悟ごに属ぞくせず。

因いん縁ねん時じ節せつ、寂じやく然くねんとして照しょう著ちよす。

通宗通途 挟帯挟路

錯然則吉 不可犯忤

天真而妙 不属迷悟

因縁時節 寂然昭著

細さいには無む間けんに入り、大だいには方ほう所じよを絶ぜつす。

毫ごう忽こつの差たがい、律りつ呂りよに应おうぜず。

今いま頓とん漸ぜんあり、宗しゅう趣しゆを立りつするによつて、

宗しゅう趣しゆわかる、即すなわち是こ規き矩くなり。

宗しゅう通つうじ趣しゆ極きわまるも、真しん常じょう流りゅう注ちゅう、

外ほか寂じやくに内うち揺ちうくは、繫つなげる駒こま、伏ふくせる鼠ねずみ、
(繫駒伏鼠)。

先せん聖しやうこれを悲かなしんで、法ほうの檀だん度どとなる。

其その顛てん倒とうに随したがつて、緇しをもつて素そとなす。

細入無間 大絶方所

毫忽之差 不応律呂

今有頓漸 縁立宗趣

宗趣分矣 即是規矩

宗通趣極 真常流注

外寂内揺 繫駒伏鼠

先聖悲之 為法檀度

随其顛倒 以緇為素

顛倒想滅すれば、肯心みずから許す。

古轍に合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ。

仏道を成ずるになんなんとして、十劫樹を觀ず。

虎の欠たるがごとく、馬の鼻の如し（虎の欠の如く馬の鼻の如し）。

顛倒想滅 肯心自許

要合古轍 請觀前古

仏道垂成 十劫觀樹

如虎之欠 如馬之鼻

下劣あるをもつて、宝几珍御。

驚異あるをもつて、狸奴白牯。

羿は巧力をもつて、射て百歩に中つ。

箭鋒あい値う、巧力なんぞ預らん。

以有下劣 宝几珍御

以有驚異 狸奴白牯

羿以巧力 射中百歩

箭鋒相値 巧力何預

木人まさに歌い、石女たつて舞う。

情識の到るにあらず、むしろ思慮を容んや。

臣は君に奉し、子は父に順ず。

順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔にあらず。

木人方歌 石女起舞
非情識到 寧容思慮
臣奉於君 子順於父
不順不孝 不奉非輔

潜せん行こう密みつ用ようは、愚ぐのごとく魯ろのごとし。

只ただ能よく相そう続ぞくするを、主しゅ中ちゆうの主しゅと名なづく。

潜行密用 如愚如魯
只能相続 名主中主